No. 119 号

営農レポート Niigata

No. 3

平成２１年４月１０日

発行： JA・全農にいがた

有機入り一発元肥の上手な使い方

近年、水稲元肥一発肥料の使用が増えていますが、中でも最近は減々栽培に対応した有機入りの元肥一発肥料が増えています。

元肥一発肥料については省力化や後期栄養持続などの効果が期待できる反面、使用方法や稲の生育など注意すべき点も多くあります。また有機入りになれば無機の元肥一発とも違ってくる部分もでてきます。

ここでは、元肥一発の特徴を踏まえつつ、有機入り一発元肥の上手な使い方について紹介します。

１．元肥一発の使用上のポイント

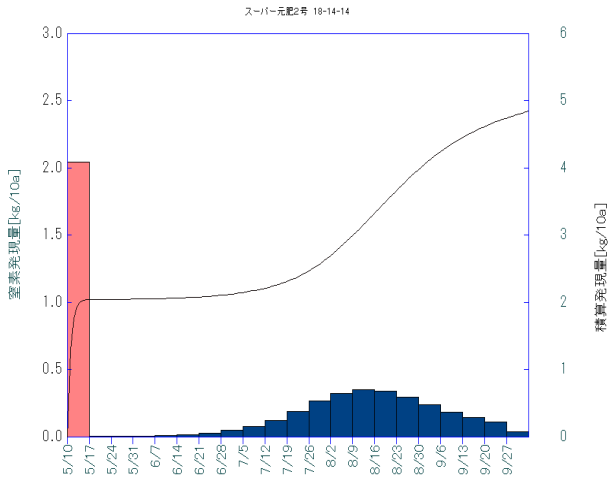
① 施肥量の決め方は、従来の元肥＋穂肥の窒素施肥量と同じか１～２割減らす。

② 散布は均一になるように行う。（過剰生育につながる）

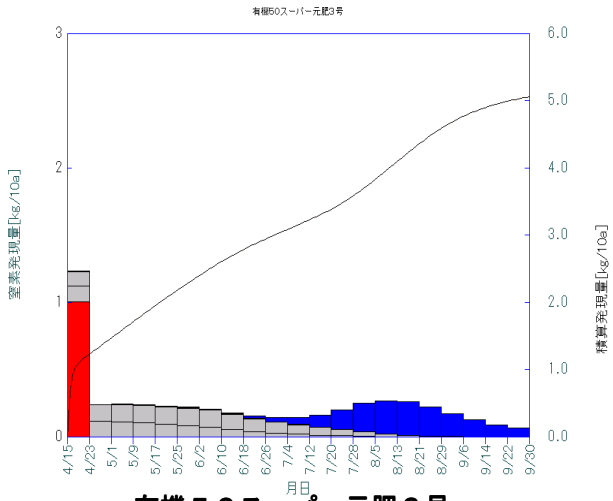
③ 夏場の水管理は従来と同じように行う。（水が無ければ窒素が溶出されない）

２．窒素の溶出パターン

窒素溶出シミュレーショングラフ（施肥から稲刈り時期まで）



スーパー元肥２号（無機）



有機５０スーパー元肥３号
（有機由来窒素５０%）

※ 棒グラフは期間毎の窒素溶出量。線グラフは積算の窒素溶出量。

◎窒素溶出の特徴（無機一発と比較して）

（１）有機が入っている分、速効性肥料が減る　⇒　**初期生育が穏やか**
・・・無効分げつの抑制

（２）つなぎ肥で有機が徐々に出てくる　⇒　**葉色がやや淡く推移する**
・・・穂肥時期でＳＰＡＤ３０前後

（３）穂肥分の緩効性肥料が登熟後期まで持続する　⇒　**元肥一発全般の特長**

※掲載内容の無断使用・転載を禁じます。

３．側条施肥での注意点

有機質を原料とした肥料は、化成肥料に比べてかさが増し、比重が小さくなるため、通常の設定では落下しにくくなります。通常の田植機の設定は仮比重：０．９を基準としているため、有機入り肥料を側条施肥する際には、施肥機の調節が必要です。

◎開度調節と施肥量の目安表　※ヰセキ取扱説明書による

施肥量（kg/10a）		開度目盛			
		40	50	60	70
比重	1.0	44	56	67	78
	0.9	40	50	60	70
	0.8	36	44	53	62
	0.73	32	41	49	57
	0.7	31	39	47	54

「有機５０スーパー元肥３号」
⇒⇒仮比重：０．７３

※計算式：施肥量（ｋｇ）×（投入する肥料の比重÷標準比重(０．９)）＝実際に落下する量(kg)

（１）開度目盛「５０」で設定した場合、仮比重：０．９の肥料が５０ｋｇ／１０ａ落下するのに対し、仮比重：０．７３の肥料は４１ｋｇ／１０ａの落下量になります。

（２）また、本会が実施した試験の結果は以下のとおりになりました。
（平成 20 年８月７日実施　仮比重０．７３の肥料使用）
開度目盛「５０」で設定した場合　⇒　３８ｋｇ／１０ａ落下
開度目盛「７０」で設定した場合　⇒　５２ｋｇ／１０ａ落下

◎まとめ

①上記の結果から、側条施肥機の開度設定は基準（比重 0.9 の肥料）と比較して２～３割大きくする必要があります。

②ただし数値はあくまでも目安であり、施肥機の年式や肥料性状との相性等で誤差が生じる場合があるので、**「試し繰り出し」を行い、実際の施肥量を確認してから作業を開始してください。**

４．代表的な品目

（１）有機５０スーパー元肥２号（１２－７－６　有機由来窒素５０％　仮比重：0.72）
（２）有機５０スーパー元肥３号（１２－７－５　有機由来窒素５０％　仮比重：0.73）
（３）有機３０スーパー元肥４号（１５－８－７　有機由来窒素３０％　仮比重：0.73）
（４）有機５０早生スーパー元肥１号（１２－７－６　有機由来窒素５０％　仮比重：0.72）

（全農新潟県本部　肥料農薬部肥料農薬推進課）

※掲載内容の無断使用・転載を禁じます。